記念講演「九大別府病院の発展に向けての提言-外科の立場から-」

九州大学名誉教授　おんが病院・おかがき病院　統括院長　杉町　圭蔵

1. おんが病院・おかがき病院　統括院長の杉町でございます。このたびは九州大学病院別府病院の新たな開院おめでとうございます
2. 本日はこのような機会をいただきましたので、これから九州大学病院別府病院がどのように発展すればよいのか、とくに大学病院として、研究と臨床のバランスの重要性と明るい展望をお話をさせていただきたいと思います。
3. 別府病院の歴史は古く、昭和6 年から八田先生が放射能障害に対する温泉治療の研究を報告され、辻秀男先生は、生体の侵襲反応制御に関する研究をなさいました。また、秋吉毅先生が腫瘍免疫に関する研究をされ、さらに、後で紹介しますが現在大阪大学へ転出された森正樹先生が癌遺伝子や癌幹細胞の研究を行っていらっしゃいました。
4. さて、21 世紀になりまして、医療環境は変化して参りました。生命科学が急速に進歩する中で、疾病の診断方法や治療法が変わって参りました。すなわち、癌の診療は遺伝子診断・遺伝子治療が主体となり、ごく最近では、臓器を再生するという再生医療が現実のものとなりつつあり、手術による臓器移植から幹細胞を用いて自分の細胞から臓器を作るという事が夢ではなくなっています。他方、高齢化が進み、疾病構造が変わる中で医療のニードに変化が起こってきています。たとえば、アンチエイジングの医療や、高齢者の医療や福祉に関する関心が高くなり、ニーズも変化してきております。こうした医療環境や社会環境の変化を敏感にとらえて、研究や医療の方向性を決める必要があります。
5. われわれの先輩は先見の明があり、先の時代をよく見通しておりました。スライドは100 年前明治時代の日本人が100 年後（すなわち現在）のわが国の様子を想像して描いたものであります。たとえば、生活様式では、右図の様に（明治時代には考えも及ばなかった）「女性外交官や女性教師が出現し女性が闊歩する一方で、男は家で洗濯をしている。」という様な生活の様子も描かれています。
6. 政治的側面では「遠からず日米戦争を惹起し、その勝敗如何により、日本の百年の運命が定まることになる。勝てば英国とならぶ大国となり、アジアの主人たるけれども、負ければ日清戦争以前の小国になる」などとしまして、先の大戦を予想しておりました。

7. また、医学の面では、福沢諭吉は今から100 年前に内視鏡または腹腔鏡の出現を予言しておりました。
8. それでは､医療は今後どのようなことが求められているのでしょうか？もちろん、病んでいる人の心を大切にした、過不足のない医療が必要でありますが、このためにも次の様な医療を推進していくべきでしょう。

（1）患者参加型医療へインフォームドコンセント
（2）情報が多く、患者の知識が豊富になるセカンドオピニオン
（3）科学の進歩に伴い診断・治療法が多様化
（4）高令者の増加で疾病構造に変化
（5）訴訟の増加・弁護士の急増
（6）経営・収益を重視した医療（病院は今後、勝ち組・負け組に2 分される。）

9. すなわち、大学や公的病院は株式会社ではないので、利益を追求する必要はありません。しかし、これからは、国や地方自治体からの支援は減少することはあっても、増加することは期待できません。従って、公的な病院であっても、ある程度の利益を出し、経済的な余裕がないと設備の充実、安全・安心な医療、患者サービス、職員の待遇改善などはできないと思われます。
10. 私が九州中央病院の院長をしていた頃に、（スライドの様に）これまで使用していた古い手術器具を捨て、新しい手術器具を購入しました。こうして手術件数を増やし、黒字経営を実現しました。このように設備を充実させ安全・安心の医療を実現することにより、病院経営は成り立ってゆくものです。
11. さて、別府病院は大学でありますので、大学に課せられた責務があります。たとえ、臨床医であっても大学人（研究者）である限り、新しい情報（研究成果）を世界に向けて常に発信する責務があります。また、同時に収益を上げられる医師でなくてはいけません。すなわち、大学の外科医には､ﾚﾍﾞﾙの高い研究が出来て、しかも同時に手術が上手い事が求められます。
12. 大学の指導者には、臨床面・経営面では患者を集める力、収益、治療成績、指導力、手術の技術が問われます。一方、研究面では世界をリードしているか？研究費を獲得しているか？情報を世界へ発信しているか？研究者を集めることができるか？などが問われます。研究へ偏重せず、臨床と研究のバランスが大切であります。
13. すなわち、臨床面・経営面では、患者を集める臨床力があり、収益を上げ、治療成績で勝負できて、後進の外科医を育て、患者に優しい手術ができることが望ま

れます。一方、研究面では、世界をリードする研究を行い、研究費を獲得でき、新しい情報を発信でき、優秀な人材を集めることができる指導者が望まれます。そこで、それらの観点をもとに、今の別府病院の外科を客観的に眺めてみたいと存じます。

14. 癌の治療に当たって、癌が難治である理由のひとつとして、癌の多様性ということがあげられると思います。すなわち、診断面あるいは治療面のいずれの側面においても多様性があり、これを克服しなければなりません。
15. また、同じ胃癌であっても多様性を有していますので、癌治療を個別化する必要があります。そのためには、癌細胞レベルでの遺伝子検索を行うと同時に、癌の広がりを正確に把握することが必要であります。そこで、遺伝子から有効な治療法を予測できないか？あるいは 微小転移を発見する方法はないものか？別府の外科では精力的に研究が行われています。
16. マイクロアレイを用いて、放射線や抗がん剤に対する感受性や抵抗性を規定する遺伝子を臨床応用可能なマーカーとして次々と発表されています。
17. また、ごく最近では、p53 野生型の症例において、大腸癌や食道癌において、極めて重要な予後予測因子となる遺伝子PICT1 を九州大学生体防御医学研究所鈴木聡先生との共同研究で同定し、Nature Medicine 誌にアクセプトされています。また、同じく森正樹先生のグループは、iPS 遺伝子と同じ働きをする細胞を、遺伝子を用いずに直接リプログラミングをおこす方法を開発し癌根治にむけて夢の一歩を踏み出したと考えています。これもごく最近、CELL 誌(Stem Cell)にアクセプトとなり、別府外科の高い研究レベルがわかります。
18. また、森正樹教授は癌組織の中の幹細胞を同定し世界で初めて報告されています。癌の増殖とStem Cell との関係は非常に興味深いところであり、癌の化学療法や放射線治療のtarget を癌組織中のStem Cell におくことで、真に根治を実現する可能性があると私は確信しています。
19. このような研究を成功させてきた背景には潤沢な研究資金の獲得があります。
20. また、九州大学生体防御医学研究所外科には、全国から優秀な研究人材が参集してくれています。
21. 一方、臨床面では、手術症例数も着実に伸びてきております。
22. 教授不在の中でも外科の診療実績は、前年比、１５０％、１１０％と増収しております。

23. 今後、さらに伸びるためには、九大本院との連携をさらに深め、大分大学医学部付属病院との連携も強固にしていく必要があると思います。また、大分地域におけるがん診療の中心的な病院をめざしていくことが重要でしょう。

24. 医師不足が深刻な中、大分大学第一外科北野正剛教授や九州大学消化器総合外科の前原喜彦教授との協力関係が非常にうまくいっており、常にスタッフの交流がなれています。

25. 最後に九大病院別府病院外科の方向性についてまとめたいと思います。大学病院ですから、臨床と研究のバランスが重要であります。まず、離床面では①癌診療のエキスパートとなり、地域の最終砦となる‥低侵襲手術と高度進行癌に対する集学的(放射線・化学)療法②福岡の本院や大分大学外科とのヒトの交流や連携を密にする‥全国的に外科医不足は深刻であり、別府には研究者が集まり難いので、これからもスタッフを送ってもらえる環境の整備。③収益を上げ、経営に貢献できる外科を目指す。大学病院ですから、是非、研究面でも我が国の外科をリードしていただきたいと願っています。現在、我が国の外科教室では最高のレ Õ˜ Ÿの研究ができており、このまま突き進む事で、更なる発展が期待できると考えております。

26. 最後に、外部の人間が垣間見た現在の外科の印象や展望を述べたいと思います。まず、研究面では別府という環境にも拘らず、多くの研究者が集まり、多額の研究費が取れており、素晴らしい研究成果が上がっている。臨床面：私は久保病院長のご厚意で「九大病院経営協議会」のメンバーに加えていただいておりまして、資料を見せて頂いていますが、別府病院は昇り調子にあります。今回、組織が新たになり、岩本教授のご配慮で整形外科が新設され、本田教授の強力なご支援で放射線治療ができるようになりました。

　　外科は癌に特化した治療を行うことで、経営にも貢献でき、別府病院は必ず黒字に移行致します。昨今は大学病院であっても、収益のことを重視する傾向にありますが、九大病院ですから、「研究にも力を入れた外科」「研究費の取れる外科」「世界に向けて新しい情報を常に発信する外科」であり続けていただきたいと願っています。

27. ご静聴有難うございました。別府病院の益々のご発展を祈っています。